

## 主体の特徴としての動作を表す文について

呉涵涵

動詞を用いた特性（属性）の表現としては、「あの人は優れている」のような、金田一（1950）の第四種動詞を述語とする文がよく知られている。この場合は動詞自体が特性を表しているが、一方、「彼は大声でしゃべる」のような動詞述語文も特性を表す文の一種とされ、このタイプの文が特性を表すのは、動詞の時間的意味の抽象化によるとされている。しかし、「彼は酒を飲む」が酒好きであるという特性を表す文として成立するのに対して、「彼はカレーを食べる」がカレー好きであるという特性を表す文としては解釈されにくいという違いを、時間的意味の抽象化の起こりやすさ・にくさに求めるのは難しいのではないかと思われる。そこで、動作を表す動詞述語文が特性を表すようになるプロセスを時間的意味の抽象化とは別の次元で明らかにする必要がある。本発表では、このプロセスを明らかにすることを目的として、コーパス等から収集した用例の観察を行ったところ、以下のように、大きく3つのプロセスがあることが分かった。

現実の動作は必ず何らかの特徴（対象・様態・方法など）を伴っている。そして、その特徴には、偶発的なものもあれば、主体の内的要因にもとづく必然的なものもある。後者であれば、その特徴は動作に付随して繰り返し現れ、主体の本質的な特徴と見なされる。そうした内的要因には、信念や価値観などの意志的な動作の源泉になるもの（タイプⅠ）と、刺激に対する生理的・心理的な反応などを引き起こす体質・気質的なもの（タイプⅡ）がある。前者の例としては「欲しいものがあると、どんな汚い手を使ってでも手に入れる」などがあり、後者の例としては「緊張すると、痙攣を起こす」などがある。このほか、内的要因によらない場合もあり、それは、その動作に付随する特徴が一般的な基準に照らして特異であると話者が評価することを通して、その特徴が主体の特性と見なされるもの（タイプⅢ）である。「よく笑う」などがその典型例である。以上は人が主体の場合であるが、物が主体の例は非常に少ない。